Nada Library Committee

灘校図書委員会誌 2026

第80回文化祭

"Polaris"

まえがき

一日に一冊、本を読みきる人がいるとしましょう。

80 年生きるとすると、この人は、生涯で約三万冊の本を読むことができるということになります。これを当たり前の数だと捉える人もいるでしょうし、逆に、自分の知の限界を悟り、無力感を覚える人もいるでしょう。後者の立場からすると、我が校の図書館には九万冊の本が所蔵されているといいますから、たとえ読書にその一生を捧げたとしても、その半分どころか、三分の一も読めないなんて、と悲嘆に暮れるわけです。もちろん、本を一冊読破することを毎日続けられる人なんて殆どいないでしょうから、実際はさらに少ないでしょう。

ですが、「自分の知の限界」という思考には落とし穴があります。本をただの「情報のカタマリ」としか見ていない、という点。人の心を埋めるのは、単なる「情報」ではなくて、寧ろ「情報に対する心の動き」なのではないか、と考えるわけです。

単に本を読んだという、その事実だけでは、生活に彩りを添える、「心に残る」体験にはなりえません。小説に限らず、すべての本には新たな出会いがあります。本を読む前に、読みながら、そして読み終えてから、何を考え、どう影響されるかを決めるのは常に読者である我々です。

とまあ、気難しいことをくどくどと述べてきましたが、これは何も、肩肘張って読書しろと言っているわけではありません。

時に再会に涙し、時に恐怖に震え、時に絶景に息を止める。まさに「一期一会」という言葉の通り、一度きりの読書を精一杯楽しみ、感動を自然体で受け止める、この行為そのものに価値があるのではないでしょうか。

本誌では図書委員たちが、読書体験だけでなく、それぞれが感じた「その先」まで綴っています。この会誌を手に取ってくれたそこのあなたも是非、自分だけの読書に耽ってみましょう。

そして今は、一度きりの第 80 回灘校文化祭『Polaris』を心ゆくまで楽しんでください。

2026 年 5 月

目次

図書館が出てくる小説などいかが p.3

短編小説のススメ p.10

フィクションにおいての恋愛 p.12

読書と合宿で見る東日本大震災 p.15

ベスト・リード p.20

図書館が出てくる小説などいかが

bee

0.はじめに

この文章をあなたが目にしているということは、きっとあなたは図書館が好きなのでしょう。実を言うと私も図書館が好きなんです。さらに言えば、世界中の本読みや物書きもまた、図書館が好きなのではないでしょうか。実際、小説において図書館は決して珍しい舞台ではありません。あなたにもいくつか思い当たる小説があるのではないかと思います。そんなわけで、図書館が登場するような本をいくつか紹介しようと思います。なお、この文章は中高生が読むことを想定して書いていますが、そうでない人もぜひ気楽に読んでみてください。

1.Of the library, by the library, for the library

日本十進分類法というのを念のため説明しておきますと、0〜9 の数字を用いて、本の内容によって図書館の蔵書を分類する方法のことです。例えばある本に「435」と符号されているならば、4 類[自然科学]の 3 綱[化学]の 5 目[無機化学]に分類される本だというように、下の桁ほど下位の細かい分類を表しています。これによって日本のありとあらゆる本は分類されているわけです。

では本題、日本十進分類法の「01」は何を示していると思いますか？——答えは「図書館．図書館情報学」なんです！　2 桁目の分類[第二次区分]は一般に、化学、医学、政治、園芸といった、かなり大きな分類のはずです。そのなかに図書館情報学なる比較的マイナーな学問が含まれているのです。少し驚きではありませんか。図書館で使われる分類法なのだから図書館に関する学問が分けて扱われていても驚きではない？そうですね……。

ご想像のとおり、図書館情報学というのは図書をはじめとするあらゆる情報の生成、蓄積利用に関することを扱う学問のことです(が、情報学は別に 007 に分類されるため、01 の下位には図書館に関することしか含まれていません。「図書．書誌学」もまた別で 02 です)。ちなみに 0 類は「総記」、つまり 1〜9 のどの分類にも当てはまらないものという意味です。

図書館についての本が読みたいな〜という人はまずは図書館に行って 01 の棚を見ることをおすすめします。分野のマニアックさの割にはどこの図書館も案外蔵書が豊富だったりします。図書館好きとしては少し嬉しいことですね。選書をするのは(図書館への興味関心が強いであろう)図書館職員なので当たり前のことなのかもしれませんが。

それはさておき。01 に分類される本は結構面白いことが多いので全般的におすすめですが、その中から一冊、『未来の図書館、はじめます』(岡本真)を紹介します。『未来の図書館、はじめませんか？』の続編ですが、こちらから読んでも問題ありません。この本は、数多の図書館プロデュースに関わってきた著者が、図書館員に向けて図書館整備の手法を説明した本です。私たち一般市

民が読んでもためになると思います。公共図書館の整備計画に市民がどのように関わるのが良いのか、行政と市民の両面から書かれていて、図書館整備の入門書として非常に読みやすいです。近年になって高度経済成長期に建設された多くの図書館が建て替えの時期を迎えているなか、この本を一読しておけば、あなたも街の図書館のために、一市民として何かできるかもしれません。市民によってつくられた市民のための図書館こそが今求められている図書館なのではないでしょうか。

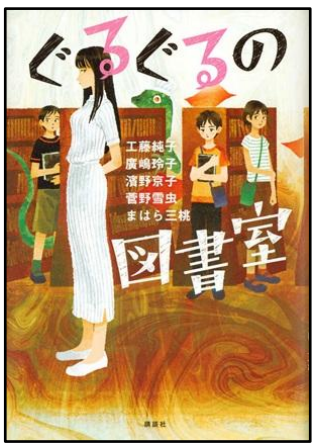
余談ですが、図書館がテーマの定期刊行物、雑誌もあるみたいです。具体的には『みんなの図書館』『図書館雑誌』など。あなたの街の図書館にも置いてあるかもしれません。

2.幼年期から始める英才教育

初っ端から期待した内容とは少し違ったかもしれませんね。今後は小説を紹介していきます。まずこの章では児童向け文学を紹介したいと思います。図書館が出てくる絵本というのも結構多いですよね。『としょかんライオン』(作：ミシェル・ヌードセン、絵：ケビン・ホークス)とか、『としょかんねずみ』(ダニエル・カーク)とか。幼児期の読書経験はその後の読書習慣に影響するともいわれます。みなさんも小さいころから親などに読み聞かせをしてもらったのではないでしょうか。よもや幼児が自分から図書館に行くとも思われないですし、周りの人が子どもの読書、図書館利用に与える影響は大きいでしょう。きっと懐かしい絵本があなたの故郷の図書館にはたくさんあるはずです。ですが今回はもう少し対象年齢が上の児童文学をいくつかご紹介。もしあなたの周辺に弟妹など小さなお子さんがいるならぜひ、おすすめしてみてください。また、あなた自身も、すでに読了していたならば久しぶりに読み返して懐かしい気分に浸るのもよいですし、初見でも大きくなってから児童書を読むことで得られるある種の感慨があるのではないでしょうか。なお、便宜上 YA やライトノベルは児童書に含めないこととします。

2.1.『ぐるぐるの図書室』

（まはら三桃、菅野雪虫、濱野京子、廣嶋玲子、工藤純子）



共通の設定で 5 人の児童文学作家が書いた短編集です。『ぐるぐるの図書室』からはじまり、『ぎりぎりの本屋さん』『じりじりの移動図書館』『くらくらのブックカフェ』と続きます。『ぐるぐるの図書室』の 5 つの短編では、「図書室の前に張り出された茜色の張り紙が見えた子は図書室で不思議な体験をすることになる」という点が共通しています。児童書だからといって侮るなかれ。私が思うに、「不思議な体験をする」というのは児童書の真骨頂にして、その魅力は一般書にも劣りません。恋愛、SF、妖怪などと、5 人それぞれジャンルさえ違う物語で、同じ設定を下敷きにしていながら作家さんごとの個性が垣間見える点も面

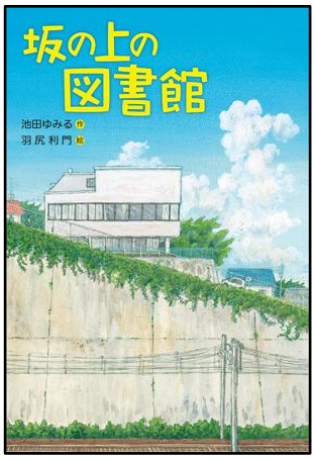
白いです。5 人ともデビューした年が同じだそうで、巻末にはデビュー10 周年記念の座談会も掲載されています。

2.2.『雨ふる本屋』（作：日向理恵子、絵：吉田尚令）

小学生のルウ子は図書館で、本棚の奥へ奥へとカタツムリに導かれ、「雨ふる本屋」にたどり着きます。そこは室内なのに雨が降る不思議な本屋。そこにある本はすべて、人間の書き終えられなかった「物語の種」を雨が育てできたそう。しかし、最近は面白い本が育たないといいます。ドードー鳥の店主フルホン氏と、その助手で半妖精の舞々子さんに頼まれて、ルウ子は「物語の種」に起こった異変の原因を調べることになるのでした。

既刊 5 巻の人気シリーズ。児童書らしいあたたかな世界と幻想的な表現に想像力が掻き立てられます。小学生低学年でも読める分量なので、みなさんには物足りないかもしれません。そんな方には同じ作家さんの『火狩りの王』もおすすめです。

2.3.『坂の上の図書館』（作：池田ゆみる、絵：羽尻利門）



本作の主人公は自立支援センター「あけぼの住宅」に引っ越してきた母子家庭の小学生、春菜。あけぼの住宅のとなりには図書館があり、生まれて初めて本に興味を持つことに。友人や司書、本との出会いが少しずつ春菜を成長させてゆく……。

こころあたたまる成長物語。ストーリーが少しとんとん拍子すぎるかもしれませんが、希望を与えてくれる本だなとも思います。作者さんはこの本を通じて子どもたちに何を伝えたかったのか、という視点で読むのもよいのではないでしょうか。特に図書館司書だった方が書いたというコンテクストを知っているとまた違った視点で読めると思います。実在の本がいくつも登場するのも良ポイント。続編として『川のむこうの図書館』があります。

3.幼年期の終わり

歳を重ねるごとに読む本というのは変わっていくものです。もちろん、誰がどの年齢で何を読むのかには決まりはありません。しかし誰しもが、中高生を境目として幼い頃に読む本と成長した後に読む本が変わっているような、そんな印象を受けます。幼少期に楽しめた本がもはや楽しみに

くくなるというのは少し寂しいことですが、新たなジャンルに出会えるという意味で嬉しいことでもあります。それでは、ここで紹介した本があなたの新たな出会いになることを願って、最後にはなりますが中高生におすすめの小説を紹介していきます。どの本も本当に面白いので読んで損はしませんよ。

3.1.『本と鍵の季節』(米澤穂信)

人が死なない推理小説全6編。傑作。堀川次郎は高校2年生の図書委員。同じく図書委員で皮肉屋の松倉詩門とともに、放課後の図書館に持ち込まれる様々なトラブルに挑むことになります。ネタバレになってしまうので内容には踏み込みませんが、遺された開かずの金庫の鍵の番号を探り当てたり、亡くなった先輩が最後に読んだ本を探したり。男子高校生ふたり、さわやかだけど苦みが残る青春ミステリ。主人公たちの機知に富んだやりとりに惹かれます。巧妙な伏線回収とあとに残される強い後味が特徴。割と不穏です。私、小説で一番好きなのは米澤穂信さんの作品なんです。読むべき。

『栞と嘘の季節』という続編があります。同じく米澤穂信さんによる古典部シリーズなどもおすすめ。

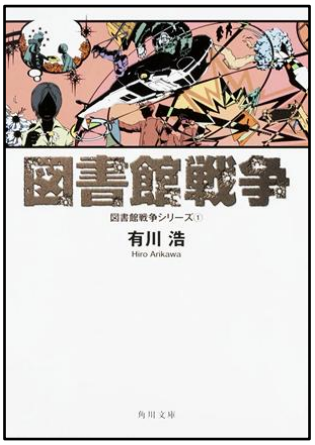
3.2.『本好きの下剋上～司書になるためには手段を選んでいられません～』(香月美夜)

有名異世界転生ライトノベル。なろう小説の代表のひとつでありながら、なろう系にありがちな都合がよすぎるところが全然ないので純粋に異世界ファンタジーを楽しめます。

あらすじ。とある本好きの女子大生はある日、識字率が低く本が少ない世界の平民少女に転生してしまう。少女マインとして生きることになった彼女は「本がなければ作ってしまえばいいじゃない」と思い一から本製作をはじめることにする。

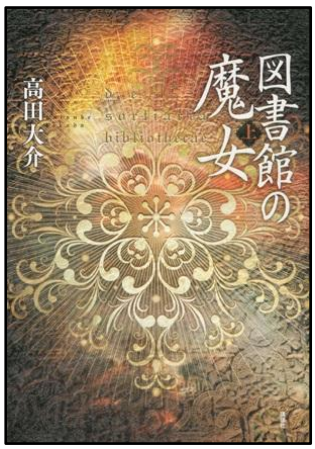
思い通りにならない環境でも諦めず、本を手に入れるという夢に突き進むマインの姿に勇気をもらえます。シリアスなストーリーのなかでもコミカルなマインの語りが面白いです。女性向けともいわれますが、そんなことないです。男性でも夢中になって読めます。37巻と番外編が2巻。あと、図書館もしっかり登場するので安心してください。

3.3.『図書館戦争』（有川浩）



言わずとしれた名作。読んだことがない人がいたら読むことを強くおすすめします。軽くあらすじを紹介しますと、検閲を強行する法律『メディア良化法』が成立している日本。検閲に対抗する図書館は「図書隊」を組織し、メディア良化委員会と日夜抗争を繰り広げていた。主人公は高校生のとき出会った図書隊員と名乗る“王子様”を追い求め図書隊に入隊した笠原郁。指導教官の堂上篤による過酷な訓練ののち、ひたむきな努力を認められエリート部隊である図書特殊部隊に配属されるのだが……。といったように、架空の世界を描くライトノベルです。かっこいい戦闘と主人公の成長、恋愛模様が魅力。シリーズは単行本で本編 4 巻、外伝 2 巻と少し長く感じられるかもしれませんが、テンポよく進むストーリーに魅入られること間違いありません。

3.4.『図書館の魔女』（高田大介）



まずは軽くあらすじから紹介。

少年キリヒトは「一の谷」の王宮に命じられ、図書館で暮らす「高い塔の魔女」マツリカに仕えることになる。古今東西の書物を繙き策を巡らすがゆえに「魔女」として恐れられる彼女は、声をもたぬ少女だった。キリヒトは図書館で多くのことを学びつつ、徐々に図書館の面々と親しくなっていく。しかし、宿敵である「ニザマ」の宦官ミツクビによる陰謀に巻き込まれていく。

長編大作ファンタジー。舞台は中世ヨーロッパを基調とした国「一の谷」と、中華を基調とした国「ニザマ」が混ざりあった独特の雰囲気。重厚そのものの世界観と、豊潤な日本語表現によって紡がれる長大な物語に気おされるかもしれませんが、ハマる人はとことんハマる、そんな小説です。単行本で上下巻に分かれており、上が 658 ページ、下が 810 ページあります。読み始めるのにちょっと勇気がいりますが、読み終わったときには読み始めた自分を褒めてあげたくなるはずです。続編も何冊かあるので、どの小説もあっという間に読み終わってしまって満足できない！という人に特におすすめです。

3.5.『箱庭図書館』（乙一）

短編集。この本は誕生の経緯が独特でして、読者に没原稿を送ってもらい、それをリメイクするという企画から生まれました。経緯からわかるように幅広いジャンルの物語を、乙一さんならではの軽妙な語り口調で味わえる、それが『箱庭図書館』の魅力です。それぞれの短編は同じ文善寺町を舞台にしていて、少しずつ共通の人物が登場するので、最初に読んだときはてっきり乙一さんがすべて書いたものだと思っていましたが。全 5 編。どれも秀逸なのでぜひ読んでみてください。

3.6.『図書館の殺人』（青崎有吾）

本で撲殺された死体が図書館で発見された！現場に残された奇妙なダイイングメッセージの意味とは。高校生の「駄目人間」裏染天馬が緻密な論理で犯人をあぶりだす。

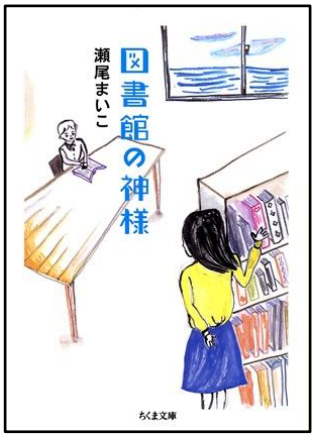
ザ・本格ミステリ。「平成のエラリー・クイーン」と呼ばれる著者が繰り出す、推理あり青春ありの裏染天馬シリーズ第 4 作。この本はフーダニットが格別。本格ミステリ初心者でも楽しく読めます。もちろん本格ファンの方でも満足できるでしょう。唯一欠点を挙げるとすればシリーズ続編がもう 10 年間も出ていないことでしょうか。

3.7.『叡智の図書館と十の謎』（多崎礼）

ファンタジー。十の謎を解き明かす 10 の短編が繋がり、一つの長編となっています。

知識のすべてが記録されている叡智の図書館。そこに至りし者は神に等しい力を手に入れるという。そんな図書館にたどり着いた旅人ローグは図書館の守人に謎をかけられる。石板に映し出される物語を通じた、旅人と守人の問答が素敵。短編ごとに物語の舞台や時代が違うので、ファンタジーの世界にのめり込みたいという人にはあまり向いていないかも。各話軽やかに読めますが、その語り口調が癖になります。多崎礼さんは『煌夜祭』もおすすめ。

3.8.『図書館の神様』（瀬尾まいこ）



バレーボールに青春をかけて挫折した清は、高校の講師になり文芸部の顧問を務めるなか、生徒の垣内くんなどの人々との出会いを通して傷ついた心を再生させていく、そんな物語。心地よい文章と軽やかな掛け合いが読者にやわらかに染み入ってきます。主人公が不倫しているのにこんなに穏やかに読めるとは思いもしませんでした。瀬尾まいこさんの作品はこれを最近になって読んだのが初めてなのですが、もっと読みたくなりました。おすすめです。

4.おわりに

ひとつひとつの紹介文がだいぶ短くなってしまいましたね。できるだけ多くの本を紹介したかったので、許してください。乱筆乱文にここまでお付き合いいただきありがとうございました。

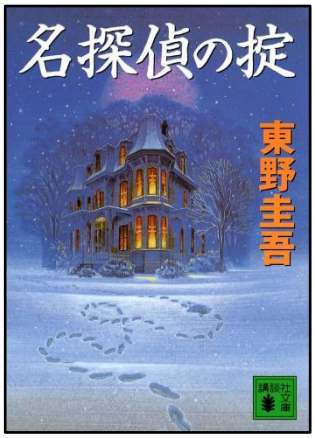
短編小説のススメ

本ポンず

1.はじめに

短編小説とはその名の通り短い小説のことだ。単純に文量が少ないので読みやすいことはもちろん、その少ない文量の中で成立している物語は、長編とは違った味わいがある。この文章では、そんな短編小説のオススメを紹介する。

2.「『花の OL 湯けむり温泉殺人事件』論」(東野圭吾)



これから紹介する「『花の OL 湯けむり温泉殺人事件』論」は『名探偵の掟』に収録されている。『名探偵の掟』は全密室、時刻表トリックなど推理小説でお馴染みのシュチュエーションを名探偵・天下一大五郎が解き明かす連作短編集である。しかし、内容は普通の推理小説と違い、登場人物たちがメタ的な発言、行動を当然のようにする愉快なものとなっている。よってこの短編も当然のように普通の推理小説ではない。この短編のテーマは 2 時間ドラマである。推理小説の原作を元に作られた 2 時間ドラマの脚本の世界として物語が進んでゆく。2 時間ドラマにするために原作のトリックが簡単なものに変えられていることなど、小説のドラマ化におけるお約束に登場人物がメタ的視点からあれこれと好きなように言うところがとても面白い。

3.「あやかしホルネリア」(梶尾真治)

この「あやかしホルネリア」は『さすらいエマノン』に収録されている、「エマノン」シリーズの中の一作だ。エマノンという、四十億年分の記憶と共に生き続ける存在を中心に展開されるこのシリーズは自分のお気に入りで、その中でも特に記憶に残っているものがこの短編だ。

ある海に発生した赤潮、それは明らかに普通の赤潮ではなく、潮の流れを無視して進んでいた。その赤潮に呑み込まれたものは死んだ生き物であっても強大な意思に操られているかのように赤潮の中を進み続ける。この異常な赤潮の描写がとても恐ろしく、このような赤潮を発生させてしまう原因を作った人間の業について考えさせられる。

4.「幸せになる箱庭」(小川一水)

この「幸せになる箱庭」は『老ヴォールの惑星』に収録されている。ビーズと呼称される異星構造物が木星の大赤斑で発見され、それら多数の機械が三百年以上前から木星の大気を採集し、外宇宙に射出していることも判明した。しかしさらに人類を驚かせた発見は、大赤斑近辺には今でも新たな被造物が送り込まれ、射出装置の数が増え続けていることだった。これは木星質量が削り取られていることを意味する。その最大の影響は、木星の軌道変化による摂動で他の惑星が軌道を外れてしまうことだとわかった。地球も例外ではなく、遠からぬ未来にハビタブルゾーンを逸脱してしまうことが予想された。それを防ぐために射出装置の活動を止めなければならなかったが、それらの機械は知性体によって作られた自動機械であり、機能変更または停止の能力がなく、物理的破壊手段は全て無効だった。残された手段はそれらの機械を作った知性体との交渉であり、人類は若干の懸念がありながらも有人交渉船を派遣した。

この紹介からわかる通り、この物語はエイリアンとのファーストコンタクトを書いたものである。しかし、そのエイリアンは人類をはるかに超越した存在で、交渉船に乗って行った人は大きな選択を迫られることになる。その選択を前に人はどのように行動するのか、どう足掻くのか。人類の認識の限界について考えさせられる物語である。

5.「邪馬台国はどこですか？」(鯨統一郎)

この短編は『邪馬台国はどこですか？』に収録されている。日本史を学んだことがある人は必ず知っている邪馬台国、その場所が未だ解明されていないことも広く知られているだろう。学者の意見はだいたい九州か畿内の 2 箇所に絞られているが、この短編の中では、邪馬台国は東北にあったと主張する人物によって全く新しい邪馬台国論が展開されていく。専門家から見るといろいろ怪しい部分もあるかもしれないが、読んでいてとても面白い。歴史をかじったことのある人は一度読んでみると良いと思う。『邪馬台国はどこですか？』にはこの短編以外にも、ブッタの悟り、聖徳太子の正体、など色々なテーマについて突飛な主張を展開しているので、この短編を読んで自分の好みに合っていれば他の短編も読んでほしい。

6.おわりに

冒頭に書いたように短編小説は文量が少ないので手に取りやすいと思う。普段本を読まない人も、これを読んで気になる短編があればその短編だけでいいので読んでみてほしい。

フィクションにおいての恋愛

UDK

みなさんこんにちは、はじめましての方は、はじめまして。お久しぶりの方はお久しぶりです。UDK です。

N700S(super ではない)の車内からまど☆マギの推し旅の車内音声を聞きながら執筆しています。JR 東海さん新大阪でも引き換えできるようにしてくれ……。

最近シャニマスを始めたのでコミュの文章について考察しようかなと思ったのですが、さすがに委員長から NG が出てしまったので、筆者のフィクションにおける恋愛描写について触れてきた歴史でも書いていきたいと思います。

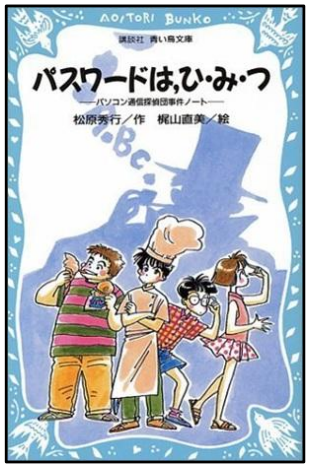
1.はじめに

筆者は普段どんな小説を読むことが多いのかというと、推理小説と恋愛小説を読むことが多いです。これらのジャンルは小説だけではなく他の媒体でも見ています。推理はテレビドラマで、恋愛は漫画やアニメ、ゲームなどでそれぞれ享受しています。今回はその中でも恋愛の方にフューチャーして書いていきたいと思います。~~ちなみにどの推理ドラマが好きかというと捜査一課長がマジで好きです。~~

2.小学生

筆者が最初に触れたフィクションの恋愛は何だったのか思い返してみると、記憶はあやふやなのですがたぶん『電車で行こう！』シリーズだったと思います。少年少女たちがたくさんの電車に乗るという、当時かなりの鉄道好きだった僕からすると夢のような作品でした。その中にうっすら好意を抱いているというかそういう描写があってそこが初めての出会いだったんじゃないかなぁと思います。

僕の中で最初の転機となったのは『探偵チーム KZ 事件ノート』です。塾に通う彩がイケメンたちと日常の謎を解いていくというお話なのですが、めちゃくちゃ面白くて、さらには、刊行スピードが速かったんですね。好きな作家が速筆だと本当にうれしい。もちろんイケメン複数人と女の子一人なので、恋愛模様が描かれるのですが、やっぱりキャラひとりひとりに個性が立ってるのでアプローチの仕方も違って、そこがやっぱり面白いところでしたね。~~もちろん黒木が一番好きでした。大人の魅力が出てますよね。~~



今のところこの時期が一番本を読んでいた時期だと思います。幼稚園から小学校に上がる際に図書館があることに対して一番喜んでいた子だったので、小学生になるともちろん図書館に入り浸っていました。読んでいた本の種類としては女の子が主人公の本がだいぶ多かったと思います。同級生からはからかわれることもあったのですが、あんまりバトル系のものが好きじゃなかったのと、子供向け文庫本の主人公は女の子が多くなりがちなんですよね。もちろん松原秀行さんの『パソコン通信探偵団事件ノート』シリーズ(いわゆる「パスワードシリーズ」)など男の子が主人公の作品もあるのですが、『若おかみは小学生！』シリーズや『龍神王子！』シリーズ、『妖界ナビ・ルナ』シリーズのように女の子の主人公の作品が多い、特に、魔法使いなどの異世界ものだと女の子が主人公になるものが大多数を占めていると思います。

『泣いちゃいそうだよ』。これは、僕が初めて読んだ、恋愛をメインコンテンツとした恋愛小説です。青い鳥文庫から出ているのですが、高校生編が YA!ENTERTAINMENT から出版されていて未来はこんな恋愛をしているのかなぁという希望と憧れをもって読んでいたと思います。まぁ、高校 2 年生になった今では男子校という魔境に進学してしまったのでそんな恋愛はできずに時を過ごしていますが。やっぱり小学生の頃って高校生に対して恋愛とか何でもできるような幻想を抱いていましたよね？ みなさんもそうだと思います。~~そんな高校生っていうのはフィクションの世界にしかいない~~灘校に入ると厳しくなると思います。出会いがどうしても制限されてしまうので……。

東方 Project との出会いもこの時期でした。マリオメーカーを持っていないにも拘わらず、延々と実況動画を見ていたのですが、そこからゆっくり実況にハマり、商標登録される前のゆっくり茶番劇をずっと見続けていました。そこからカップリング(キャラクター同士の恋愛関係)という存在を知り、これがその後に大きくかかわることになります。東方 Project ではアリスと魔理沙のカップリングである「アリマリ」が好きだったので、アリスと魔理沙のボイスドラマにとてもハマり、ニコニコ動画という存在を知りました。

3.中学生

灘中に進学した僕はどうなったのかというと、本当にすごい学校図書館があるにもかかわらず、本自体を小学生の頃よりも読まなくなりました。特に、恋愛小説に関しては「有川ひろ」ぐらいしか読んでいないと思います。恋愛小説よりも面白い恋愛をしていたから……。というわけではなく単純に自分にとって遠いものになってしまったからですね。共学に対して共感というものがしづらくなってしまい、読む量が減ったんだと思います。

じゃあこの時期何をしてたんだよという話ですが、ニコニコ動画にハマった僕は百合(女性同士の友愛、恋愛関係など)についての知識を深めていっていました。そういうものの歴史を見るのって楽しいんですよね。また、百合というのをある意味で現実性を持たないものとして捉えているものの、別学ということもあり共感できる部分もたくさんあったことが関係しているのではないかなと思います。その中でも一番衝撃を受けた作品として挙げられるのが、『私の百合はお仕事です！』シリーズ。古本市場に 6 巻ぐらいまで一冊 100 円で売っているのをふと気になって手に取ってみたのですが、人生を変えられたと思います。昨日は中央線に乗って舞台である吉祥寺にも向かいました。感情の機微というのが本当によく表現されている作品だと思います。

4.高校生

そんな筆者は高校生になってどうなったのかというと、年末にアイドルマスターシャイニーカラーズ(シャニマス)を開始しました。**円香、樹里、にちかが好きです。**シャニマスのいいところとして挙げられるのは、コミュ(お話)がすごく深いという話です。そのまま出版しても全然小説としても見ることができると思うような作品なんですよね。

5.おわりに

来年は最後なのでちゃんと考察したいと思います。

読書と合宿で見る東日本大震災

メダカ

1.はじめに

2026 年 3 月 11 日をもって、東日本大震災(以降「震災」)から 15 年が経った。津波等で甚大な被害を受けた地域は概ね居住可能にはなったものの、著しく流出した住民を完全に元に戻すことは困難であり、被害は依然として残る。また、世界中に衝撃を与えた福島第一原発の事故の影響はより強く続いており、未だに帰還困難区域(※1)が残る上、汚染土壌(※2)の最終処分(※3)の問題は深刻である。今は殆ど聞かなくなったが、福島県産の農産物等に対する風評被害も決して無視できるものではなかった。

そんな中、灘校では東北合宿といって被災した地域を見学する機会が設けられており、今回僕は福島合宿に参加した。この記事ではまず福島合宿における体験に関して記述し、そこから震災について考えるための本を 3 冊紹介しようと思う。

2.福島合宿について

福島合宿は、例年他校(今年は関東の学校)と合同で企画されている、福島県の被害や復興について学ぶ 2 泊 3 日の合宿である。観光を除くと、企画は大きく分けて 3 種類あった。それぞれについて、自分の振り返りの意味も込めて紹介しようと思う。

1 つ目は、被災した施設や復興施設の見学だ。浪江町立請戸小学校(※4、写真 A)や福島県立双葉高等学校(※5)は、震災によって壊滅的な状況に追い込まれた。その時の惨状がそのまま残され

※1 居住は出来ず、立ち入りも制限される地域。

※2 放射性物質が積もった地域を再び居住可能にするために、表面の土を取り除くこと。現在は帰還困難区域内にある中間貯蔵施設に埋め立てられている。

※3 除染した上でも再利用が難しい一部の汚染土壌を、中間貯蔵施設から運んで埋め立てる等の措置。埋め立てる土地の確保に問題を抱えており、福島県外であることだけしか現在決まっていない。

※4 津波の被害が甚大だったものの、奇跡的に全生徒が助かった小学校。現在は震災遺構として内部が公開されている。

※5 原発事故の影響で休校になった高校。復活を望む声もあるが、今のところ目処が立っていない。

ており、活気のある学校が震災によって一瞬で空洞化する様子を実感した。また、特別に中間貯蔵施設の中にも入り、土壌が埋め立てられている様子を見た(※6)。中間貯蔵施設内には、津波で全壊して植物が生い茂った状態の水産種苗研究所があり、特にここで研究者が失われたことを知った時はショックだった。

さらに、同じく中間貯蔵施設内の展望台から、福島第一原発を直接見る機会もあった(写真 B)。ここが元となって福島が先の見えない道を歩むことになったとはいえ、3-2.『死の淵を見た男』で紹介するように、この現場で必死に事故を抑えた人々がいたことを考えると、いたたまれない気持ちになるとともに、畏敬の念も湧いてきた。

写真 A：請戸小学校

企画の 2 つ目は、現地の人々や、復興に携わる人々の話を聞くことだ。家族を津波で亡くした語り部の方、「道の駅なみえ」の設立に関わった人、夜ノ森地域(双葉郡大熊町)でバウムクーヘン屋を営む人など、多くの人の話を聞けた。特に印象深かったのは、元双葉郡大熊町在住で、津波によって娘を亡くした方の話だった。娘の捜索は津波発生後すぐに始まったが、翌日原発事故による「全町避難」によって捜索を強制的に中断されることになり、最終的に遺骨の発見は 10 年以上後まで遅れた。全町避難が無かったら、娘が生きて見つかった可能性も否定は出来ないと仰る。原発事故の重大性、そして全町避難の是非について考えるきっかけとなった。

写真 B：福島第一原発

そして最後に、企画の 3 つ目は、参加者同士で意見を交換する「振り返り」だ。それぞれの日で学んだことについて、箇条書き形式でまとめ、共有した。また、最終日では我々が今後も考え続けたいことと、具体的に福島県民でない我々でも出来ることについてグループで議論した。後者についてまとめられた意見の一つに、我々が実際に福島に行って学んだことを共有し、周囲の

※6 上に覆土がかかっているため、土壌の上に立っても被曝の心配はない。

人にも問題意識を持ってもらう、というものがあった。今回この場を借りて震災について書かせて頂こうと思ったのもこれがきっかけである(※7)。

このように我々は、震災について「知る」とともに、「考える」ことを行った。特に復興の方針に関しては、答えが1つに定まるものではなく、我々も完全な結論を出せずに福島を後にすることになった。それでも、福島に行ったことの意義は非常に大きく、比較的恵まれた立場にいる我々が人生観について考え直すきっかけにもなった。東北に行かないと分からないことがある、というのは本当だと思った。しかし、例え東北に行ったとしても、それだけで震災について十分に知り、十分に考えることは難しいかもしれない。それを補うものは、震災に直接関係する人の経験を記した本を読むことだと思う。そこで、これ以降では、特に震災に対する思考が刺激されると感じたノンフィクションを3冊紹介する。

3.1.『紙つなげ！彼らが本の紙を造っている 再生・日本製紙石巻工場』(佐々涼子)

現代は電子書籍が大きく台頭した時代ではあるが、やはり紙の本の人気は根強い。紙の本の良さに関しては、弊図書委員会でも議論を行ったことがある(読書尚友2025年11月号『災害』参照)。そして本の紙は、我々の想像を絶するほど繊細な作業によって作られている。日本における本の紙は主に王子製紙と日本製紙によって作られており、後者の最大の工場(基幹工場)は宮城県石巻市にある。日本における出版の生命線が石巻にある、と言っても過言では無い。

しかし、石巻と言えば震災における津波の被害が最も大きかった地域であることはご存知だろう。石巻工場は、奇跡的に従業員全員が命を取り留めたものの、誰も復興の希望を抱けないほどに壊滅的な状況に陥った。繊細に張り巡らされた電気設備がほぼ完全に動かなくなったのだ。

また、近隣住民には多数の犠牲者が出た。建物の屋根に逃げる住民の救助を諦めざるを得なかった従業員や、近隣住民が避難所から戻ることを許した末に、その住民が津波にのみこまれてしまったと言う従業員の心境を考えると居ても立ってもいられなくなった。多くの用具が散乱する工場から津波に流された多数の遺体が発見される光景は、想像するだけでも非常に痛ましい。

そのような絶望的な状況の中、工場長はなんと僅か半年で一台の機械を動かすことを宣言した。復興のモチベーションを保ち、会社と出版業界を守るためには、半年でも遅すぎるくらいだと言うのだ。

※7 例年灘校文化祭では、気仙沼や福島などの東北合宿に行った生徒により「東北企画」というブースが開かれているが、今年は諸事情により行われない。よって、この図書委員会誌で震災に関する本の書評と合わせて書かせて頂きたいと思った。

誰もが無謀すぎる計画だと考えた。しかし、一切ぶれない工場長の熱意と、一つの目標に一丸となって向かう中下手な言い訳は出来ない、という従業員達の矜持によって、復興は着実に進んでいく。果たして「半年復興」を成功させることはできるのか？

3.2.『死の淵を見た男

吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日』(門田隆将)

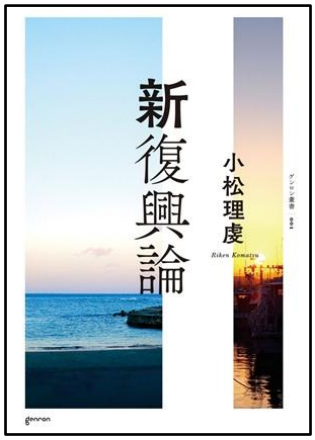
福島第一原発の事故は、前述のように福島に多大すぎる影響を与えたことは間違いない。しかし、その影響を最小限に抑えるために、未曾有の事態において最善の選択肢を取った人々がいた。

原発事故の防止において最も重要なことは「原子炉を冷やす」ことだ。停電時には非常用ディーゼル発電機が起動するため、普通は地震が発生しても冷却用の水の供給が止まることはない。ところが、なんとそのディーゼル発電機が津波により浸水して使えなくなるという前代未聞の自体が起きた。到達した津波の高さが想定を遥かに超えていたためだ(約 15m)。

完全な停電で制御室が暗闇に包まれ、原子炉の状況も分からなくなった中、従業員は原子炉への注水やベント(※8)に全力を注いだ。特に消防車の手配において、自衛隊や関係企業も大きな役割を果たした。

停電の中、バルブの開閉や注水作業、ベント作業は原子炉付近で手動で行う必要があった。いつ津波が再到来するか分からず、放射線量も高まる中、作業する人々は恐怖でいっぱいだった。そんな中彼らを駆り立てたのは、日本を守るという使命感だった。ノンフィクションならではの、極限状態のリアルな人間ドラマが存在したことは、是非頭に入れておいて頂きたい。

3.3.『新復興論』(小松理虔)



震災が起こった後、「復興」という言葉を幾度となく目にするようになった。では、その「復興」とは何だろうか？単に賠償金や補助金を貰って、震災前の状態を復元することであろうか？この本では、筆者の出身地であるいわき市や福島を中心として、復興とは何かを考えていく。

福島県いわき市出身の筆者は、福島第一原発沖の海洋調査、かまぼこ生産業、アートプロジェクトと、様々な側面の「復興」に触れてきた。そんな筆者は、復興に最も重要なことは「外部の声を聞く」ことである

※8 単純化して言うと、放射性物質を含む気体を排出することで、原子炉格納容器の圧力を下げ、格納容器の爆発を防止すること。

と主張する。一言で外部と言っても、空間的、思想的、そして時間的な外部、と様々な意味が包含されている。特に時間的な外部、つまり過去の人物の声に耳を傾けるために、文化、そしてアートに目を向けることも重視されている。

堅いタイトルに反して、筆者が実際に行った場所を観光者目線で記述している部分も多く、まるで福島県を旅したような気分にさせてくれる本だ。筆者も「ダークツーリズム」という言葉を使っているが、いわきや「ロッコク(国道 6 号線)」沿いの明るい風景とディープな風景を両方味わった気分にさせてくれる。筆者は、観光も復興の一大要素としているのだ。無論実際に行くことでしか得られないものも非常に多いが、素人目線では気づかない地域の側面に読書を通じて気づけることも少なくない。

復興に正解はない。筆者を含めた復興に対する様々な考えに触れた上で、福島の復興のあり方、そして自分の地域の活性化について自身で考えてみてほしい。

ベスト・リード

Septem

はじめましての方ははじめまして。

色々と、記事のテーマを考えてみたはいいものの、一つの基準で本を選ぶというのはむつかしいものでありまして。いたくシンプルな題材で書かせていただくこととなりました。

タイトルの通り、高校生のあいだに出会って、「読んでよかった！」と思えた本をご紹介します。私、あまり布教などするタイプではございませんが、この本たちはぜひ読んでいただきたい、そんな思いで書評を書いてまいりました。どうぞお付き合いくださいませ。

1.『熱帯』(森見登美彦)

一言でいえば、壮大な話、としかいいようがありません。作中では「千一夜物語」、いわゆる「アラビアン・ナイト」が何度も登場しますが、まさにそのスタイルを踏襲したような形式が特徴の作品です。本作は筆者、森見登美彦の語りで始まりますが、そこへ登場した女性「白石さん」が物語を語りはじめ、「物語の中の物語」が始まります。その話の中でもさらに登場人物が別の話をして、さらに別の物語が……と、物語は入れ子構造になって、複雑になっていきます(まさにそれが千一夜物語の特徴である、とはじめのほうで述べられています)。

この小説では、『熱帯』というタイトルの小説が中心となって話が展開していきます。

> 『熱帯』(佐山尚一)
>
> この物語は、南の島に流れついた主人公の不思議な冒険譚である。彼は記憶を失い、自分が何者なのかもわからないまま、どこかの島に取り残されていた。島を探索するうち、彼は「佐山尚一」と名乗る男に出会う。彼の話によれば、この海域には島々を魔術で支配する「魔王」がいる。佐山はその魔術を盗み出すためにやってきた「学団」の人間なのだった。やがて主人公は佐山とともに、魔王のもとへと向かうことになる……。

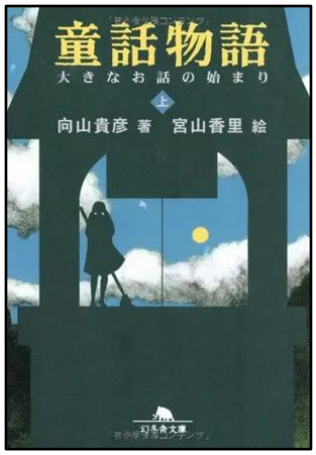
「私」はかつてこの小説を買ったものの、最後まで読み切る前に本を紛失してしまいました。しかも、いくら探しても『熱帯』という小説を見つけることはできません。そうして未練の残ったまま年月は経ち、「私」はたまたま参加した読書会で「白石さん」に出会います。彼女もまた『熱帯』を読んだことがある人物でした。しかし、白石さんもまた、結末まで読むことはかなわなかったといいます。

「この本を最後まで読んだ人間はいないんです」という不思議な言葉とともに、彼女は『熱帯』をめぐる物語を語り始めます……。

絶対に読み切ることのできない小説、『熱帯』について。その正体を探るための組織「学団」の話。『熱帯』の作者である「佐山尚一」の話。次々と謎が生まれていきます。「あらゆることが『熱帯』に関係している。この世界のすべてが伏線なんです」その自由自在な物語の広がり方は、確実に本作の魅力のひとつだといえます。クライマックスの疾走感はすさまじく、びっくりするほどページが進みます。今までに登場した事物が次々に回収される快感はたまりません。ラストシーンについては私自身、解釈しきれていない部分もあるので、改めて読み直してみたいですね。

『熱帯』とはいったい何なのか、その結末はどうなっているのか。森見登美彦の『熱帯』と佐山尚一の『熱帯』が織り交ぜられ、なにが現実でなにがそうでないか分からなくなる。まさに夢見心地の読書体験でありました。「読む」というより「体験する」といったほうが似合っている、そんな大きな物語を、ぜひその目でお楽しみください。

2.『童話物語』(向山貴彦)



こちらは、まさに正統派のファンタジーといった雰囲気の作品です。筋書きはわかりやすく、意外とシンプルなのですが、不思議と心に残る一冊でした。

上巻のあらすじは以下の通り。

――教会ではたらく少女ペチカは、仲間や教会の守頭にいじめられていた。ある日、彼女は妖精のフィツと出会う。フィツは最初に出会った人間を研究し、「世界は滅びるべきか」を判断するためにやってきたのだった。しかし、妖精たちは疫病「ディーベ」を広めるとして人々から恐れられていた。その妖精とたまたま一緒にいたことにより、ペチカはクビになってしまう。そして、守頭から逃れるため、住む場所を見つけるために彼女とフィツは旅をする――。

また下巻では、ペチカを探すために町を出てきたルージャンという少年が2人目の主人公として描かれます。ペチカとはぐれてしまったフィツと出会い、彼は彼女を見つけようと旅に出るのですが……。

この作品は、細かいところまで設定が組まれており、それによって世界観がより深く伝わってくるようになっています。私は元来作りこまれた物語が好きなのですが、特にファンタジーとなると、世界に関する情報が多ければ多いほど心惹かれます。この物語では、地形、歴史、名産品や長さの単位までが詳しく描写され、舞台となるクローシャ大陸が本当に存在するのではないかという気分にさせられました。登場人物の会話や行動にも、架空の世界とは思えないリアリティ(ビリーバビリティ)があふれていて、ファンタジーとしてとても完成度の高い一冊となっています。

上巻の巻末についている「クローシャ大百科事典」ではクローシャの歴史背景などを深く知ることができるので、その部分も含めて読むことをおすすめします。

さらに、主人公ペチカとルージャンのキャラクターにも引き込まれました。彼らは初登場時、性格のいい人間とは思えないかもしれませんが、序盤から後半にかけて内面が分かってくるにつれ、どんどん感情移入できるようになっていくことでしょう。そして彼らは、目指すものへの真剣な想いを常に抱いており、それが本作ラストの感動を形作っているように思われました。

この物語中では世界の最後「妖精の日」も、とても美しく描かれています。少し長い話ではありますが、この美しい風景で織りなされる物語を、是非一度読んでみてはいかがでしょうか。

3.『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林』(鄭執)

3つの物語が収録された作品集です。3作に共通して、舞台は中国の瀋陽市、そこに住む青年が家族に関する問題を抱えるところからストーリーが始まります。3本目の「森の中の林」についてはやや長いものであるため、ここでは初めの2作品についてあらすじを紹介しようと思います。

1つ目の物語、「ハリネズミ」。主人公が恋人に「僕はハリネズミを食べたことがある」と語るところから展開する本作は、彼とその伯父さん「王戦団」との関係を描いています。この伯父さんは精神病と診断されたことで職を離れ、親族とも距離のある人物ですが、幼い「僕」はしばしば彼と一緒に過ごし、様々な交流をするのでした。この話の中では、時系列を行ったり来たりしながら、王戦団の過去、「ハリネズミ」が意味するもの、そして「僕」が抱えていた悩み……。色々なことが徐々に明かされていきます。

この物語で最も魅力的なのは、やはり中心人物たる王戦団でしょう。読書をしながら足先で将棋を打つ、正月に家の屋根から飛び降りるなど、たびたび変わった行動をとる彼ですが、しかし、子供時代の「僕」に与えた影響が最も大きい人物でもあります。彼の力強い言葉遣いは、鬱々とした雰囲気の今作の中で、読者をも救われたような気持にさせてくれました。

そして2作目、「モンテカルロ食人記」。タイトルだけでは何もわかりませんが、私の心に一番残った一作です。大雪の日、主人公の「僕」は恋人と駆け落ちをするために「モンテカルロ」という名の洋食店で待ち合わせをしますが、彼女はなかなか現れません。そこへやってきたのは、叔父さんの「魏軍」でした。彼は「僕」に気付くと話しかけ、昔話を始めます。恋人がやってこない焦りもあって、叔父さんへの苛立ちを感じ始める「僕」。しかし、叔父さんの話と「僕」の回想が次々に展開するにつれ、不穏な事件の気配が漂ってきます。そして、主人公を取り巻く環境の悪さも浮き彫りになり、「僕」のかかえる不安ははっきりと読者に伝わってくるのです。外の雪はますます酷くなり、街で殺人があったという噂が聞こえ、叔父さんの持ち込んだ「木箱」はいっそう謎めいて……。

最後の数ページで急転直下の展開を迎える今作は、3作のなかでもとくに「語りの上手さ」を感じられるものでした。

これらの物語はどれも、どこか重苦しい空気をまとっています。この小説を読んでいる途中には、えたいの知れない不吉な塊が心を始終おさえつけているような、そんな焦燥感を味わうことでしょう。

しかしラストシーンにおいて、主人公たちはしっかりと救われたように思われます。一冊を読み終わった瞬間の解放感は、たしかに唯一無二のものでした。

ちなみにこの小説では、中国、とくに東北部の文化や伝統がたくさん描かれます。信仰であったり食事であったり、普段あまり接することのないような中国文化にも触れることができる点でも、たいへん魅力的な一冊といえるでしょう。

この作品のもうひとつの特徴に、「鍵カッコがほとんど使われていない」ということがあります。長い会話シーンなどにも明確な区切り目は感じられず、まるでその場で話を聞いているように、なめらかに読み進めることができます。謎が解かれていき、クライマックスに向かって加速する瞬間には、次々にページをめくってしまうことでしょう。ぜひ憂鬱な気持ちのあとの、少しずつ目の前が晴れていくような心地よさを味わってみてください。

4.『プロジェクト・ヘイル・メアリー』

（アンディ・ウィアー）

今まで紹介してきた本に較べると、かなりお手軽で読みやすい一冊です。映画化もされまして、ご覧になった方も多いのではないでしょうか。皆さんご存じかもしれませんが、改めて紹介させていただきます。

といっても、何を言ってもネタバレになってしまいますね。映画未履修、未読という方はうらやましい。ぜひ、余計な情報は入れずに、まずはご一読ください。

あらすじは飛ばして、本作の魅力について語っていきましょう。まずは、なんといっても「科学の面白さ」がしっかり伝わってくることです。主人公の周りでは原因不明・全く未知の問題が起こりつづけますが、「仮説を立て、実験してそれを立証し、解決策を見つける」という過程が丁寧に描かれており、次々とやってくるトラブルを解決する主人公は、科学者のカッコいいところを思う存分に見せてくれるのです。

そして、設定の明かし方もうまい。研究によって分かった事実と既知の事実を組み合わせると、この疑問が解決できる！というシーンがいくつも出てきますが、そのたびに読者は驚かされ、スッキリとした気分を味わうことができます。実際の現場には詳しくありませんが、長年の

研究に結果が出た瞬間の喜びはちょうどこんな感じ、いえ、この何十倍も大きなものなのでしょう。そういった科学の楽しさを、本作は垣間見せてくれます。

本作の世界観においては、ロマンも満点です。光速に近い速度で航行できる宇宙船、それを可能にするスーパー燃料、言語解読、固体キセノン、船ごと変形する遠心装置の機構……。聞いただけでワクワクする文字列でしょう？　さらには、回想シーンで語られる地球上での作戦もスゴイ。映画版ではどうしても描ききれない部分もありますから、ぜひ両方に触れてもらえたら嬉しいです。

そして、なんといってもラストシーン。序盤からは絶対に予想できないラストでしたね。しかし、これ以外にはありえないといえるほどの綺麗な収め方でもあって、心から、読んでよかったと思えた一冊でした。

３月時点ではありますが、2026 年のベスト本とさせていただきます。「よい、よい、よい！」です。

5.終わりに

ここまで読んでくださった方へ、ありがとうございます。私は高３になってしまいまして、来年はもはや会誌を書くこともかなわぬ身……。そう思うと感傷的になってしまいますわね。

さて、最近は小説を読む機会も減ってしまいましたが、読むとやっぱり面白いものです。種々の悩みは尽きぬもの、それでも、そういうのはいったん脇に置いといて、「でも面白い小説が読み切れないほどあるということはそれだけで無条件に良いこと、それだけでステキなこと、みんなよく頑張った、人類万歳！」(森見登美彦『熱帯』)のマインドでやるのもいいな。そう思いました。

さいごに。灘校文化祭、そして灘校図書委員会をこれからも応援くだされば うれしいです。

6.番外編

おまけです。

保育園～小学生ぐらいのとき読んでいた本で、とくに面白かったものなどをあげていこうと思います。少なからず、今の私はこれらの本によって形作られたといえるでしょう。

6.1.『としょかんライオン』

(作：ミシェル・ヌードセン、絵：ケビン・ホークス)

非常に好きな絵本です。図書館にやってきたおとなしいライオンは子供たちと仲良くなりますが、問題が起こって……。シンプルですが心に残る、いい話ですね。

6.2.『いやいやえん』（中川李枝子）

素朴な感じの童話集です。一時期、めちゃくちゃ読んでいたように思います。いたずらっ子のしげる君が、悪さをしたりトラブルに遭ったりするお話。しげるを食べようとして準備をするも、振り回されてうまくいかないおおかみの話が一番好きです。

6.3.『ぼくは王さま』（寺村輝夫）

どこかの国の王さまを主人公とした児童文学。何歳になっても、何度読んでも面白いです。今読んでみると、かわいいのに意外と残酷だな……？　と思うところもあって深みが増す気がします。『魔法使いのチョモチョモ』とか、『王さまどうぶつえん』とか。「テレレッテ、プルルップ、トロロット、タッター」は私が一番好きなオノマトペです。

6.4.『デルトラ・クエスト』（エミリー・ロッダ）

多分、初めて触れたシリーズものです。デルトラ王国を守るために、7つの宝石を集める旅に出る青年のお話。「伏線回収」「謎解きパート」みたいな概念に初めて触れて、ひどく興奮した覚えがあります。あまり覚えていませんが、なんでも第3シリーズまですべて読んでしまったようです。

6.5.『ナルニア国物語』（C.S.ルイス）

有名なファンタジーのシリーズです。ナルニアという不思議な国にやってきた子供たちの冒険譚。私の中で、「異世界ファンタジー」のイメージは今でもこれです。影響を受けて物語を書いてみたりしましたね。

6.6.『風の又三郎』（宮沢賢治）

皆さんご存じ、宮沢賢治。小学生のときに色々読んでみたのですが、この作品が一番好きです。小さい学校ならではの距離感とか、地方ならではの空気感などが感じられるように思います。コロナ禍で学校が休みになった時分に読み返して、郷愁を誘われたのを覚えています。

6.7.『檸檬』（梶井基次郎）

これも有名な短編。なぜかはわかりませんが、ひどく惹かれます。重たい空気が好きなのかもしれません。「私」の感情の動きにつられて、クライマックスでは読んでいる側もどこかほっとした気分を味わえます。

編集後記的な何か

どうも、柿すももです。これまで読書尚友の校閲・編集は何度かしてきましたが、これほどの規模のものは初めてです。本当は自分も記事を書きたかったんですが、時間がなくて叶わず。残念です。現在時刻は午前０時。達成感を感じますね。締め切りを守るだけじゃなくて、余裕をもって行動しろという教訓を毎度のことながら得ます。もうこれは仕方ない。

さて、まえがきで書いたことは、野﨑まどさんの『小説』に影響されている部分も大きいと感じます。ぜひ読んでみてください。『小説』といえばアレですね、似鳥鶏さんの『小説の小説』も面白いですね、という具合に脱線しまくっていきそうなので編集後記はこれにておしまいです。さようなら！

～STAFF～

編集・校正　柿すもも

表紙イラスト　Septem

【記事】

bee　メダカ

本ポンず　Septem

UDK

2026 年度　灘校図書委員会誌

2026 年 5 月 1 日　発行

発行者　灘校図書委員会

印　刷　文化委員会総務課印刷班

製　本　灘校図書委員会

※乱丁・落丁はお取替えいたします。無断転載・複製を禁じます。